

女子部 美術展に際して

中村知子 金井知子

女子部の美術は本物を見る、また本物の素材に触れることを大切にしている。描写の力を基本とし、平面構成や立体の勉強へと展開する一方、形や色彩の基礎勉強をもとに布や木、金属など様々な素材を用いてデザインおよび工芸制作へと発展させている。美術教育の目的は単に技術を身につけることではなく、日々の生活の中に活かす美的な感性を養うことにある。今回は、遠足や、体操会といった様々な教育行事や他教科との教科横断的学習に焦点をあて、過去4年間の作品を展示した。

<美術展までの準備>

1 学期に高等科3年の常務リーダーをはじめ様々な実務の係を決め、具体的な準備が始まった。6月下旬から各部の生徒リーダーと教師で、週に一度会議をとり、展示内容から会の運営に関わる細々としたことまで話し合った。前回の美術展と係の組織も変更した。準備リーダーが「展示会場」、副リーダーは常務を把握する責任を持った。

2 学期に入りいよいよ本格的に準備が始まった。食堂と小食堂、第一予備室および食堂前芝生を展示会場とした。展示会場の各係（作品・キャプション・道具・パネル）で会場模型をつくり、美術教師と共に具体的な展示計画を練った。食堂は窓が多く採光条件は良いが壁面が少ないため、光を遮らずに多くの壁を立てる必要がある。前回の美術展でも食堂が会場となったが、その後食堂の改装工事があり、天井の高さや照明の位置が変わったため、殆ど一から考える事となった。またパネルは前回まで鳥の子紙を貼っていたが、今回は白のペンキを直接塗ることにした。作品の係は細かい出品リストを作り在校生全員の作品が出品できるようにした。また、キャプションの係は作品のタイトルだけでなく、一部の作品には制作過程の説明もつけた。

実際の展示作業は会の始まる前週の土曜日午後から行った。土曜日の昼食後から女子部全員で椅子とテーブルを運び出し、高等科3年を中心に

絨毯をしきパネルを立てた。パネル立ては、前回まで男子部の力を借りていたが、女子部生徒もジグソーやドリルを上手に使えるようになるとうと、すべて自分たちで立てることにした。高等科3年の実力が多くに発揮され、予定通り壁が立ち上がった。



翌月曜日から4日間をかけて、実際の展示作業をした。今回は新たな試みとして、展示作業にすべての生徒が関わられるようにと考え、学年ごとに展示の時間を設け、自分たちの作品を協力して展示した。各クラスリーダーが高等科3年の会場係と事前に打ち合わせをして、実際の展示作業ではクラスリーダーが中心となって指示を出し、順調に展示することが出来た。展示作業によって作品を客観的にみて新たな発見をし、また展示効果や空間認識においても学びを深める機会となり非

常に意味のある事だった。とても楽しそうに展示している様子があり、作品に対する愛着を深める機会になったようにも感じる。



自分たちの作品を展示する

<展示の構成>

平面作品については、水彩画、油絵、版画、デザインとそれぞれまとめて展示したが、立体作品については展示の分類をあえて明確にせず、それぞれの作品が美しく調和をもって展示されるように考えた。食堂中央には天井の高さを活かし、色彩の美しさを感じられるよう構成した。

小食堂は照明の作品を展示し、暖炉に火をくべて、落ち着いた温かい空間に、また第一予備室は、楽しくわくわくするような空間をめざし、展示会場全体にリズムが生まれるよう工夫した。食堂前の芝生にはテラコッタの鶏や、木で作った動物たちを、点在させ動物園のようなイメージで展示した。

<女子部の美術カリキュラム> 女子部では前回の2008年度美術工芸展を終え

て見てきた課題をもとに、カリキュラムの見直しを行った。他教科や初等部、最高学部とのつながりも考え、学年に応じて授業のねらいを明確にした。指導者の入れ替わりもあり、教師それぞれの専門が授業で生きるようにすることも考慮した。自由学園創立以来続けられてきた美術教育の目的と方法の確認と、これからの美術教育に求められるものを考える良い機会となった。

そして「自分の目で見、耳で聴き、手で触れ、五感を働かせて身近な自然や物の中に隠された美を発見する目と発見する心を育てる」「物の美しさを感じる心や感性を培い、日々の生活を美しく豊かにすることができる人を育てる」という大きな目標のもと、下記のように中等科、高等科の指針を考えた。

中等科

- ・自分の目でよくみる。
- ・自分の気持ちを素直に表現する。
- ・他者との違いを知り認め合えるようになる。

高等科

- ・ものを組み立てる力を養う。
- ・様々な素材に触れ特性を活かせるようになる。
- ・自分の考えや感じたことを表現できるようになる。
- ・生活に美術の学びを展開させ、真の豊かさを理解出来るようになる。

2010年度からこの新しいカリキュラムをもとに授業を行った。今回の美術工芸教育発表会では2010年度から2012年度前期分の作品の中から、計59種類の作品を展示した。



中等科 植物のスケッチ

<各学年の授業と展示作品>

中等科1年 (指導 中村知子 金井知子)

毎年、入学して最初に学園の風景を描くところから女子の美術の勉強が始まる。一年生の目にはまだ見慣れぬ学園の庭は新鮮にうつり、そのことが画面からいつも伝わってくる。対象を良く見る

こと、1人1人独立して画面に向かうことを大切にしている。透明水彩絵の具に初めて触れる人も多い。たっぷりの水で濃淡を作る事、また混色によって自在に色を作れるように3原色や補色についても学ぶ。

色彩の勉強は発展させ、身近で使えるクッションや手提げなどの工芸作品へと展開する。今回はステンシルによるプリント生地作りから始めた。植物のスケッチからデザインした型を渋紙に切り抜き、いくつも重ねて染め、1つの模様を作る。色を少しずつ変えながら何度も繰り返し、記事全体に模様をほどこした。そこから自分の欲しいバッグのデザインを決め、裁縫の授業で習った技術を生かして縫いあげた。実際に使うことのできる作品を通して創ることの楽しさを感じ、美術が生活の中に生きていることを実感できるようにと願っている。



ステンシル作品

中等科2年 (指導 金井知子・中村知子)

中等科2年では、少しずつ「表現すること」について考えられるようにしたい。また、創作の楽しさよりも、上手につくれない事への葛藤が生まれてくる年代であり、美術に対するの苦手意識を持ってしまふ生徒も少なくない。そこで、音のイメージをドローイングで表すといった授業を行い、「上手」につくることが美術の目的ではないことを実感出来るよう工夫している。また、摺り上がるまで完成のみえない版画の制作を通して、偶然性が持つ表現の可能性も感じられるように

と考えている。美術展を目指して、女子部の日常をテーマに合作で大画面の木版画を制作した。

一方、よく見て発見するという基礎的な力もつくように、自分の履き古した運動靴をデッサンした。形を正確に捉えることよりも「質感」や「らしさ」を表すことを大切にした。



木版の合作

中等科3年 (指導 古川武彦 中村知子)

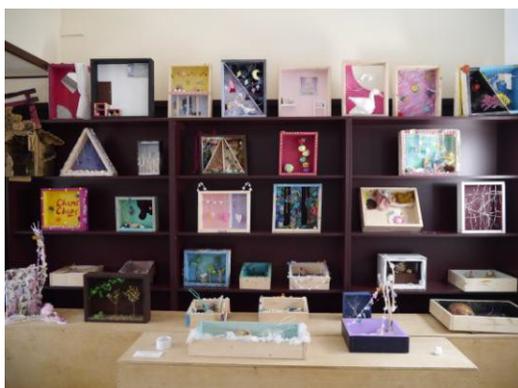
中等科3年では、立体を中心に学ぶ。感覚的な事だけでなく考えて構成できる力を養いたい。塑像では、飼っている鶏や友達や先生をモデルにデッサンをして動勢や量感に気づき、それからテラコッタで制作した。生活風景や遠足の様子を立体作品で表した作品は、動きのある生き生きとした作品となった。またそれぞれの作った人物を集合させて授業風景や料理の材料運びなど日常の一場面を表現することは皆楽しんで取り組み、人物だけでなくリヤカーや机、黒板など周りを構成するものも作り上げた。

また油絵にも取り組んでいる。春の学園風景をテーマに3原色と白の4色で描いた。これは1年生の時に学ぶ3原色と混色の学びをさらに深める機会にもなっている。水彩と異なり、何度も筆を加えられることから、水彩とは違ったのびのびとした表現が見られた。水彩絵の具との併用もできる特殊な油絵の具を使い、利便性に配慮した。

感受性豊かなこの時期に、自らの内面に目を向ける事がふさわしいと考え、ボックスアートにも取り組んだ。のこぎりを初めて手にする人もいた

が、コツをつかむと台形や三角形などそれぞれ工夫を凝らした箱を作り上げた。

素材には、夏休みに海で拾った流木や貝殻、小石などの自然素材、金属の部品、毛糸や綿など様々なものを用意した。ガラスや金属など冷たい素材と木や毛糸、布など温かい素材の違い。それを感じとりながら、調和させたり対比させたり引き立てることを体感した。多くの選択肢の中からイメージにふさわしいものを選ぶこと、壊れた古いドアノブや金属の部品も立派な表現素材になることなどを学んだ。心象風景を幻想的に表現したもの、色彩効果を生かしたオブジェ、住みたい部屋などそれぞれの「私の世界」が表現された。



ボックスアート



テラロケット制作

高等科1年 (指導 清野圭一 金井知子)
絵画及び平面デザインを中心に、中等科での学びをさらに発展させ意識を高めることを目指している。高等科になり感性の赴くままに造形する

だけでなく、表現すべきテーマを考え、表現力を高めるために技術的なことも学ぶ。一つの作品に長い時間をかけてじっくり取り組み、完成度をあげることも大切に考えている。

絵本の製作では絵画(抽象的表現)、デザイン(エディトリアルデザイン)工芸(製本)、そして言葉を組み合わせる国語的表現という複合的な内容である。計20時間を超える取り組みとなった。まず水彩絵具を使って偶然性を活かしてドローイングを行い、次に、詩や物語といった文学作品のなかから自由にいくつかの文章を選ぶ。ドローイングと言葉を配置してデザインを考える。最後に表紙のデザインを考え製本する。文字の形や画材によって、印象が大きく変わることなどデザインの基礎的な要素に気づけた人も多くいた。それぞれ夢中で取り組み、大きさも形もそれぞれユニークな工夫を凝らした楽しい作品が完成した。

また、数学と合同で授業を行うという試みも実現した。数学の近藤先生に黄金比や正多角形に関する授業をしていただき、その後、実際に黄金比を用いて平面構成をした。身の回りや自然界に黄金比や白銀比といったバランスのとれた完璧な比率が存在し、様々なデザインにも活かされていることを知り、また、美術が他分野(今回は数学)とも密に関わっているということを理解するきっかけになることを目指した。



絵本

高等科2年

(指導 古川武彦 高橋珠子 中村知子)

高2では基礎的な力の上に、様々な素材に触れ、その特性を活かした造形ができることを目指している。今年は銅板を用いた打ち出し加工の照明と夾纈染を制作した。

銅板の照明では1枚のケント紙を折り畳んだり切ったり曲げたりし、限られた大きさからできる形の可能性を探る。すぐに思いつく人もいれば何度も作り直す人もいる。ものを組み立てる力を養い、自分の考えを表現できるようになる演習になる。銅板は炎で熱してら冷水につけ、焼きなました状態にして加工を行う。

光の漏れる効果を想像しながら、切ったり叩いたり、金属と格闘していく。留めたいところをリベットでかしめる。金属ならではの加工を通し、素材の特性を肌で感じる事が出来る。

図書館で使っていた古い書架の板を加工して土台とし、コードやスイッチを自分で繋ぎ、選んだ電球を取り付けた。金属のうねりや打ち出し模様を生かした抽象作品、貝殻や傘などの具象作品など様々であった。明かりを灯すと予想以上の光の効果に歓声が上がった。美術の制作を通し、自らの思いや計画を形にしていく力、他者との違いを認め合うあう機会となっていることを実感する。持ち帰った作品はそれぞれの家の中で灯り、生活の中で美術を愛好する心を養っていくことだろう。



銅板を打ち出す作業

万華鏡をモチーフにした絹の夾纈染も制作した。これは教科横断的学びの機会として、制作過程と物理、数学、化学の面からの学びをまとめ発表した。その様子は別頁にまとめたのでそちらをご覧ください。



照明を組み立てる

高等科3年 (指導 田村満恵 金井知子)

2010年度より高等科3年は主に工芸・デザインを中心とするクラスと絵画表現を深めるクラスとに分かれ、どちらかを選択することにした。少人数ならではの授業内容も可能になり、6年間の集大成として、じっくりと作品に取り組み完成度をあげる事を目指している。また、最高学部での学びにつながるよう、表現すべきテーマを自分なりに見つけていけるようにと願っている。

工芸・デザインのクラスでは、改装された女子部講堂に設置するスタンドグラスの製作を行った。クラスで相談して聖書の中から、創世記第一章3節『神は言われた。「光りあれ。」こうして光があった。』をテーマに選んだ。最高学部長大貫隆先生に特別授業をして頂きこの箇所について学びを深め、デザインを考えた。サイズも大きく、忍耐のいる製作であったが、美術展直前まで半年をかけて完成した。また枠の設計と製作には男子部非常勤講師で木工作家の望月勤先生にご協力いただいた。



スタンドグラス小品



刺繍

もう一つのクラスでは、油絵による自画像の制作に取り組んだ。油絵具の特性を活かし、「作っては壊す」ことを繰り返して、偶然生まれる調子を活かし、表現の幅を広げることを目的とした。また、銅版画にも取り組んだ。化学の授業で、塩化第二鉄によって銅が腐食する現象を理論的に理解したうえでの取り組みとなった。5cm 四方の小さな画面だが、小さくとも力のある作品を作る事を目指した。テーマは自由としたが、個々の世界観が静かに強く表れた味わいのある作品となった。



エッチング (蔵書票)

ワークショップ

普段の授業で取り組んでいる内容で、お客様にも制作を楽しんでいただけるように、今回の美術展でもワークショップを行った。

高等科3年の係りを中心に内容を考え、マーブリングによるカード作りに決まった。本場イタリアのマーブリングの繊細さに迫るべく、試作が始まった。使用したのは、日頃高等科2年生が衣類管理室で使っている洗濯糊(CMC)とターナーの三原色絵具、オックスゴール(牛の胆汁。界面活性剤)である。洗濯糊や絵具の濃度の割合によって模様の出方は変わる。係の二人は何度も試作を繰り返し研究した。糊の濃度、絵具の濃さとその垂らし方、模様のつけ方、紙への吸い込み具合などなど。さらに水分の切り方、乾かし方など参加者の身になって考えて準備した。

会期中は交代で生徒が指導者となり、幼稚園児から大人までたくさんの方々に制作を楽しんで頂くことができた。年齢の様々な人に教えるということの難しさも感じつつ、参加者の笑顔に生徒自身、喜びを感じた三日間であった。



終わりに

ワークショップ風景

女子部の授業では様々な教科の学びが横断的に関わり合っている。美術も数学や生物、物理、家庭科と密接に関わり合い、影響し合っている。今回改めてそのことを再確認することができた。それぞれの教科と生活体験のつながりを大切に、これからも豊かな学びを深め発展させられるようにと願っている。



会場中央



彫塑 飼っている鶏 中等科3年



学園風景 全学年



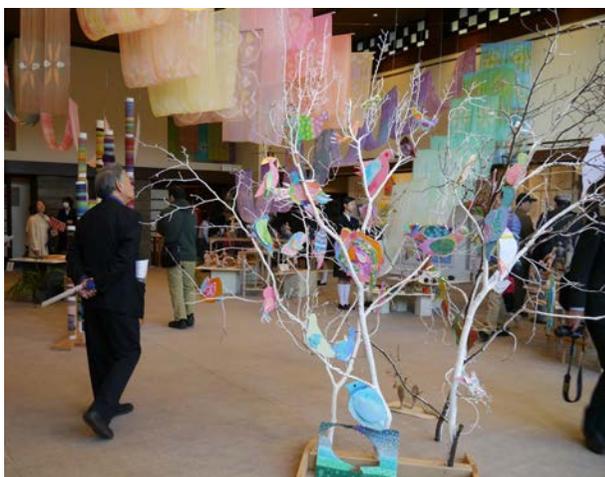
植物の形 アルミ板打ち出し 高等科 2年



自然の形を活かして 中等科 2年



色々な鳥 中等科1年



展示会場の様子



秋の彩り フェルティンダ 中等科1年



生活の道具 素描とコラージュ 中等科1年



観察と表現 一魚をテーマにー 中等科2



3原色による静物 油絵 中等科3年



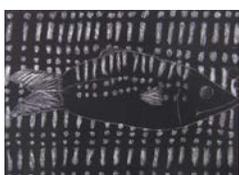
体操する人物・木版画
中等科 2年



私たちの毎日 木版画 中等科 2年 (合作)



私の靴 素描 中等科 2年



観察と表現 一魚をテーマに 中等科 2



3原色による静物 油絵 中等科 3年



塑像 生活の中から 中等科3年



木の葉の色彩構成 中等科3年



海の生き物 中等科3年



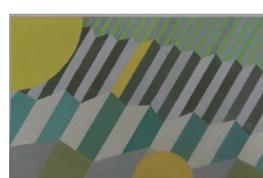
絵本 高等科1年

多面体に描く 高等科1年



野初アツツン 高等科1年

白と黒の世界・ドライポイント 高等科1年



黄金比を用いた平面構成 高等科1年



人物の表現・コラグラフ 高等科1年



絵本 高等科1年

多面体に描く 高等科1年



秋の草花 学園の庭から 高等科3年



コラージュによる表現 高等科3年



「花」糸で描く 高等科3年



スタンドグラス 光あれ 高等科3年



私の小さな世界 銅版画 高等科3年



絵本 高等科1年



多面体に描く 高等科1年